

自由論題3、報告1

報告テーマ

毛沢東時代に中国経済は成長していたか？

A Short Essay on the Alternative Estimates of China's Economic Growth: Was China Really Growing during the Mao period?

氏名(所属)

中兼 和津次(東京大学)

NAKAGANE, Katsuji(The University of Tokyo)

三並 康平(帝京大学)

MITSUNAMI, Kohei (Teikyo University)

要旨(800字程度)

中国経済は、公式には改革開放前も平均年率 6.2%で成長してきたといわれて。他方、茅于軾(天則経済研究所栄養理事長)は実質ゼロだったとしている。その大きな差異は、一つには成長率の取り方の違いによるものだろうし、もう一つは毛沢東時代の公式 GDP 統計の信頼性の問題、あるいはその両方の要因によるものと思われる。そこで公式 GDP を用いて各年の成長率の平均を取ると、確かに毛沢東時代(1952-77年)の平均成長率は 6.2%になるが、時間を説明変数とする回帰分析を施し、得られた回帰係数から導かれる成長率は 2.3%にとどまり、かつ一人当たりになるとわずか 0.26%でしかない。その意味で毛沢東時代成長率はほぼゼロだったという茅于軾の説明は間違いではない。

次に公式 GDP 統計の代わりに、李克強指数や CAP(China Activity Proxy)指数の方式に倣い、食糧生産、鉄鋼生産、エネルギー消費などいくつかの物量指数を基に毛沢東時代の GDP を推計し、それを用いて当該期間の成長率を推計してみると、物量指数のウェイトの取り方によって結果は大きく異なることが分かる。試験的に 1992 年の物量単位当たりの総生産額と付加価値額を取り、それを基準に毎年のウェイトを求め、特定の物量指数成長率にかけて平均値をとって比較してみた。等ウェイトにすれば公式成長率よりもやや高めに成長率は出るが、食糧生産に大きいウェイトを掛けると比較的lowめの成長率が得られる。どれが実際の成長率に近いのか、それを判定する絶対的、決定的な方法はないが、省別の同様な推計を含め、多様な推計方法を試みることによって、比較的実勢に近い成長率が求められてくるとと思われる。本報告はそのための試論的作業である。